



慶應義塾大学ビジネス・スクール

あの人が話し出すと授業が止まる

- 5 それは、思い出すだけでも重苦しくなる。東京メトロポリタン・ビジネススクールの北大路講師にとっては、苦痛の3ヶ月だったといえるだろう。

- 東京メトロポリタン・ビジネススクールでは、修士課程と博士課程の他に、社会人向けの研修コースを開講していた。期間は3ヶ月であり、全日制かつ全寮制だった。MBAのエッセンスを集中的に学ぶことができることや、3ヶ月の間、他の参加者と寝食を共にするため、人脈をつくることもできることから、定員はいつもいっぱいだった。
- 10 クラスは40名で構成され、参加者はさまざまなバックグラウンドをもっていた。平均年齢は約40歳。当然ではあるが、企業派遣が9割を超えていた。

- 15 講師の北大路は、企業での勤務経験はなく、国立大学の学部を卒業するとそのまま大学院に進んだ。修士課程を修了した後、海外で博士号を取得し、昨年从这个東京メトロポリタン・ビジネススクールでマーケティングを教えている。博士論文を翻訳したものを日本で出版したところ、「東京経済新聞賞」を受賞したり、また、学会では研究実績が高く評価されており、北大路はアカデミックな領域で、密かに自負心をもっていた。

20

東京メトロポリタン・ビジネススクールでは、ケースメソッドという教育方法を取り入れていた。それは教師が一方的に講義をする形ではなく、ケースと呼ばれる事例教材を用いて、教師がディスカッションリーダーとして参加者の議論を導くことで学びが形成される教

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、大倉由利子（ケースメソッド教育研究所）が作成した。（2004.12）

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ケースの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp）。また、ケースの注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ケースのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送は、これを禁ずる。

育方法であった。そのため、参加者が教師よりも多くの知識を持ち、経験豊かであっても、教師はクラス討議の進行役に徹すれば、学習効果は高くなるはずだった。

その人に北大路が最初に出会ったのは、レセプションパーティーのときであった。腰の低い、声のかすれた、いかにも営業畑の長そうな人物であった。その人の名を仮に香田氏としよう。香田氏は、名刺の束の中から 1 枚抜き取り、うやうやしく北大路に渡した。「あなたのように、お若いのに、このプログラムに参加されるとは、大したもんですな」。30 歳になったばかりの北大路にとっては、香田氏は父親くらいの年齢である。51、2 歳くらいだろうか。北大路が参加者と間違えられてもいた仕方なかった。

北大路が自分は教師であることを告げると、香田氏は最初は驚いたものの、その後、クスリと笑って、「時代は変わっていますからね」と、皮肉ともどうとも取れる言葉を残して立ち去った。

香田氏は、関西の薬の卸会社の取締役だった。その卸会社の社長が、やはり東京メトロポリタン・ビジネススクールで開講されている 1 週間の「経営者コース」に参加して、いたく気に入り、香田氏を派遣したのであった。香田氏は、日々の業務から 3 ヶ月も離れて研修に参加することに不満を感じていたようだった。クラスの平均年齢は約 42、3 歳だったから、香田氏はその中でも最年長であった。

北大路講師の苦痛は、最初の授業から始まっていた。「先生、それ、違うな」「先生、そんな例、世の中見渡してもどこにもありまへんわな。机の上だけのことと違いますか」。香田氏は、当ててもいないのに、合いの手をいれるようにタイミングを合わせて、口を挟んでくる。しかも、すべて否定する言葉ばかりである。「うちの会社では、そんなことしまへん。できとったら、今頃丸の内に本社ビル建ってますよ」。

香田氏が話し出すと、水が引いたように参加者が黙る。参加者にとっては、香田氏に反論してエネルギーを消費するのがばかばかしいからなのか、あるいは、どうせ時間がたてば香田氏も落ち着くから、それを待っていればよいと割り切っているからなのか。いずれにしても、香田氏の発言とともに、議論の流れは滞った。このクラスでは香田氏が最年長であり、24 時間いっしょの生活の中で、彼の存在感がとても大きかったのも、彼より若い参加者たちは香田氏に面と向かって意見できる状況ではなかったようでもあった。

北大路講師としては、教室では香田氏に支配的に振舞わせたくなかった。しかし、議論の

舵取りを自分がしなければならないことは重々承知していても、クラスを立て直すことができず、そんな自分自身にいらだちを感じていた。他の参加者はこの時間が通り過ぎるのをただ待っているだけであり、北大路を助けてくれることなどありそうもなかった。

5 北大路講師はむかしから人好きで、年長者からもかわいがられる性格だった。これまで人間関係で苦労したことはそれほどなかったのだが、さすがに香田氏のいるクラスで教えるのはいやだった。授業のある日の朝は胃が痛くなったし、気のせいなのかもしれないが、体もだるかった。

10 その日も香田氏は、北大路がリードする討議にタイミングよく乱入するかのようには発言していた。「先生、それは、違います」「あーあ、どうして先生はわからんことなのかねえ」と、その日はまるで北大路にかまってもらうのを楽しんでいるかのようであった。北大路は、それらの発言をあからさまに無視し、「誰か他にありませんか」と、他の参加者の発言を促した。その日は香田氏もいつもと違っていたが、北大路もいつもの北大路ではなかった。ある意味、香田氏に対して挑戦的であった。いつものように発言権を与えてしまうのではなく、それを奪回し、香田氏をあえて無視していた。しかし、香田氏はそんな北大路に負けずに、自分の言動をますますエスカレートさせていった。「先生、先生、き・た・お・お・じ・せ・ん・せー」「質問で一す。マーケティング勉強する前に、どれだけ会社にお勤めでしたか」。香田氏は半ば机に身を乗り出し、手を挙げながら発言していた。

20 クラスは、北大路と香田氏の間の凍てついた空気の中で、結末がどうなるのかを不安に満ちながら、その状況を見守っていた。

「では、意見も出揃ったようなので、次の設問に入ります。」と、北大路は、香田氏の声が聞こえなかったかのように、黒板に設問を書き出したそのとき、思い切り無視されたことに
25 頭にきた香田氏は、ついにこの一言を解き放ってしまった。

「ここで学ぶことなんて何もあらへんのや」 — 学びを共にする場にはまったく似つかわしくない怒号が、教室に響き渡っていた。もう誰も口を開けなかった。

30

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

不許複製 慶應義塾大学ビジネス・スクール 2005 Jul.

コンテンツワークス株式会社 BookPark サービス
